ジャック・ロンドンとマーク・トウェインに見られるダーウィニズム

小林 多恵子

序論

アメリカは19世紀後半になると、深刻な不況のもとで経済構造が大きく変化し、技術改革がすすみ、大規模な設備を必要とする重化学工業が発達した。電灯、電話機、蓄音機、映写機、自動車、カメラ、タイプライターなどが商品化され、新しい生活様式も生まれた。しかし、労働者は低賃金や劣悪な労働条件に苦しみ、経済変動の荒波にさらされた農民も不満を強め、大不況を背景にして、労働運動や社会主義運動、農民運動が高揚して、社会的な緊張が高まった。ヨーロッパ文明への信頼がゆらぎ、価値観の画一化が図られ、黒人差別、社会主義運動への迫害などの風潮が広がった。この当時チャールズ・ダーウィン（Charles Darwin, 1809-82）の進化論[1]が、イギリス本土よりも大きく話題となる程アメリカにも広まり、人々の思想と宗教観念を根底から覆すこととなった[2]。

このような時代を生きたジャック・ロンドン（Jack London, 1876-1916）と、マーク・トウェイン（Mark Twain, 本名Samuel Langhorne Clemens, 1835-1910）は、それぞれダーウィンの影響を受けており、ともに動物を主体として用いた作品を残している。しかし、これまで、彼等の文学を比較・考察した研究は見当たらない。本稿では、ダーウィニズムがロンドンにおいては自然主義文学という形で、トウェインにおいてはリアリズム文学（特に彼の唱える人間機械論）という形で現れる様を紹介し、両者の文学を比較、考察していく。

1. ジャック・ロンドンの作品に見られるダーウィニズム

ジャック・ロンドンは、自然主義文学者である。アメリカの自然主義文学には少なからずダーウィンの影響があることは疑うことのない事実であるが[3]、特にロンドンの作品には生存競争（the struggle for existence）、適者生存（survival of the fittest）、自然淘汰（natural selection）を意識した語句や思想が強く表現されている。自然主義は人間を社会的環境と遺伝とにより因果律で決定される存在と考えるもので、環境決定論である。そのため、自由意志の働く余地はない。

『野性の呼び声』（*The Call of the Wild*, 1903）の中でロンドンは、社会的環境によって主人公のバックという犬の思考や行動が変化することを描いている。

> This first theft marked Buck as fit to survive in the hostile Northland environment. It marked his adaptability, his capacity to adjust himself to changing conditions, the lack of which would have meant swift and terrible death. It marked, further, the decay or going to pieces of his moral nature, a vain thing and a handicap in the ruthless struggle for existence. It was all well enough in the Southland, under the law of love and fellowship, to respect private property and personal feelings; but in the Northland, under the law of club and fang, whoso took such things into account was a fool, and in so far as he observed them he would fail to prosper.[4]

バックは都会という文明社会の中で、人間とともに何不自由のない暮らしをしていたが、突然やってきた人間に襲われ、野生の世界に引きずり込まれてしまう。都会で生活していた頃に持っていた信念、愛、友情は次々に崩れ去っていき、以前は窃盗などする必要も、する気もなかったバックだったが、荒野で生き残るためには、窃盗も働くようになっていくというのである。飼い主のために自分の命も捨てることができた程の道義的な考えの持ち主であったバックも、荒野の厳しさを目の当たりにし、道義的な考えにこだわっていてはいられなくなる。社会的環境の変化（都会

から荒野へ移動）により、バックは内面的にも変化していった。これは環境によって適合しようとする本能が働いたことによる。それはダーウィンのいう「適者生存」[5]に当てはまるのである。ここでロンドン自身が“fit to survive”及び、“struggle for existence”という語句を用いていることからもダーウィニズムの影響を読み取ることができる[6]。

『白い牙』（*White Fang*, 1906）では、主人公の子オオカミ（ホワイト・ファング）が、人間を動物の中で首位に昇りつめた動物であることを本能で感じる様子が描かれている。

> The cub had never seen man, yet the instinct concerning man was his. In dim ways he recognized in man the animal that had fought itself to primacy over the other animals of the Wild. Not alone out of his own eyes, but out of the eyes of all his ancestors was the cub now looking upon man.... The spell of the cub's heritage was upon him, the fear and the respect born of the centuries of struggle and the accumulated experience of the generations.[7]

野生で生きる子オオカミのホワイト・ファングは、人間を今まで一度も見たことはなかったが、人間は荒野の動物の中で首位にのぼった動物であることを本能で感じる。そして、その人間に対する恐怖と尊敬は、何世紀にもわたる闘争と何世代もかかって積んだ経験からきているとしている。つまり、ここでは生物は遺伝によって特色づけられ、自然の掟により決定されることを描いている。これは、ロンドンの思想が、古代からの種の自然淘汰と生存競争により生物は進化を続け、人間が高等動物になったというダーウィンの進化論[8]と一致しているためこのような描写となったと考えることができる。社会的環境と遺伝により適者生存、自然淘汰が起こり、弱肉強食となっていく。『野性の呼び声』にも次のような描写がある。

> He [Buck] was beaten (he knew that); but he was not broken. He saw,

once for all, that he learned the lesson, and in all his after life he never forgot it. That club was a revelation. It was his introduction to the reign of primitive law, and he met the introduction halfway. ...a man with a club was a lawgiver, a master to be obeyed, though he did see beaten dogs that fawned upon the man, and wagged their tails, and licked his hand.[9]

バックは野生の弱肉強食の世界と初めて遭遇し、しだいに自身の中にある野生の本能が現れていく。犬は鋭い牙や爪を持っているが、人間はさらにそれを上回ることのできる道具を使えるという能力を持っている。そのため、犬であるバックは人間に逆らおうと立ち向かうが、棍棒を持った人間には力では到底勝てないということがわかり、生きるために仕方なく人間に従うというのだ。棍棒を持った人間というのは、力を持っているためこの世の立法者となりうる。生物は生き延びていくために、競争を続けている。その競争に勝つため、生き残っていくために生物は変化をしていく。つまり、自分の生命を守るための武器がしだいに進化していくのである。つまり、人間の棍棒が犬の牙や爪よりも強いために、人間が勝者になった。弱者の犬は大人しく従うか、更に抵抗して殺されるかのどちらかである。生きるためにバックは人間に従う道を選んだというわけである。このようにロンドンは、力のある者がこの世を制し、それよりも弱い者が生きて行くためには、その者に従わざるをえないという世界を描いており、ダーウィンの弱肉強食、適者生存の理論と一致している。以上のようにロンドンの作品にはダーウィニズムの影響が強く、明確に表れている。

2. マーク・トウェインに見られるダーウィニズム

ロンドンの作品には、環境と遺伝に左右される人間と動物が描かれている。また、『野性の呼び声』や『白い牙』という彼の代表作で、動物を主人公としていることは彼の作品の大きな特徴であり、そうすることによって、人間を客観的に考察できる内容となっている。人間は、荒野のように文明がなく生存が過酷な場所に行くと動物のようになってしまうことを示唆しているかのようである。ロンドンの描く文明社

会では、愛や友情などの道義的な考えが存在し、そのもとで人間と動物は生活をしている。その文明社会の対照的なものとして荒野の世界が描かれている。荒野の過酷な世界では、武器を用いることができる人間を動物界の首位である高等動物として描き、その武力に敵わない犬やオオカミたちは、人間への恐れからくる服従の姿を露呈している。野生である荒野は、憎しみと恐怖と破壊の世界とされている。

ここでロンドンと同時代を生きたアメリカの作家マーク・トウェインの作品にはダーウィニズムがどのように影響しているかについて触れておきたい。拙論 “The Change of Mark Twain’s View of Animals—The Influence of Charles Darwin—”[10] では、トウェインの動物描写におけるダーウィニズムの影響を次のように述べた。ダーウィンの著作を読む以前と以後では、トウェインの動物描写に大きく違いがある。ダーウィニズムに触れる以前の動物描写は、動物を人間よりも劣る存在として描いている。しかし、以後の動物描写では、動物を人間と同等の存在もしくは、人間は下等動物よりも劣っているという描き方に変化しているのである。それは、トウェインが、神は世の中の生物すべてを創造したという天地創造説ではなく、種は常に進化しており、人間も動物から進化した存在にすぎないというダーウィンの科学的思想に触れたからといえる。ダーウィンとトウェインの共通している説は、人間の意志は神によってあらかじめ決定されたものであるという運命論（予定説）ではなく、自然現象によって人間の意志が規定されているという環境決定論である。ダーウィンは、人間が高等動物であることを科学的に認めてはいるが、その人間が下等動物以下の残忍な行為をすることについて嘆いている[11]。トウェインは、人間は進化するにつれて心は大事なものを失っていることから、高等動物よりも劣化しているとダーウィンの進化論を前提としながら独自の理論を展開している。そして、人間が劣化している様子を動物と比較して描写することにより、動物から人間は学ぶべきであることを示唆しているのである。

ロンドンと同じくトウェインもダーウィニズムによる環境決定論の思考が作品に反映されている。しかしトウェインは文明があることにより、人間は動物以下となったと考えている点がロンドンと大きく異なる点である。文明社会が良心を生み、その良心に人間は支配され、不幸になると展開し、良心が人間を高等動物よりも劣

化させる原因の一つとして挙げている。トウェインの晩年の作品である『人間とは何か』(*What Is Man?* , 1906) には次のようにある。

> Conscience—that independent Sovereign, that insolent absolute Monarch inside of a man who is the man's Master. There are all kinds of consciences, because there are all kinds of men. You satisfy an assassin's conscience in one way, a philanthropist's in another, a miser's in another, a burglar's in still another. As a guide or incentive to any authoritatively prescribed line of morals or conduct (leaving training out of the account), a man's conscience is totally valueless.[12]

良心と一言でいっても様々な良心があるとトウェインは考えている。民族や文化、時代によっても良心の価値観は異なる。そのため、良心を教えられた子どもは親を満足させるために自身で望まなくても善良なことをしようとする。ある良心としては、善良とされることであっても、本当にそれが人間として善良なことであるかは確かではない。良心が逆に邪魔して、善良なことから遠ざかっている可能性もある。さらに、良心が逆に悪を行わせてしまう場合もある。それは善い行いとして教育されるとなぜそれが善い行いであるのかわからずに行なってしまう。人間は考えなくなっているのだ。

トウェインの代表作である『ハックルベリー・フィンの冒険』(*The Adventures of Huckleberry Finn*, 1885) では、正悪のどちらの行動をすべきであるかで悩み、良心の呵責で揺れ動く主人公ハックの心が描かれている。ハックは友達の黒人奴隷ジムが奴隷から解放され、自由を得られるように手助けをする。しかし、当時のアメリカは奴隷制が蔓延る世の中であり、奴隷である黒人を自由州に逃げさせることは大きな罪となり、逃げた黒人の捕獲をすることが正しい行為とされた時代であった。そのため、ハックはジムを白人に引き渡すか否かで良心の呵責に駆られるのである。ハックは悩みながらも、白人にジムが逃げようとしている事を隠し続けた。ハックは自分がジムを引き渡さなかったことで悪いことをしてしまったという気持ちでみ

じめになるが、いざジムを引き渡したとしてもどっちみち嫌な気持ちは残るということに気づく。その後も、幾度となくジムを白人に密告しようかと悩み続けたハックであったが、最終的にこう結論を出す。

> I shoved the whole thing out of my head and said I would take up wickedness again, which was in my line, being brung up to it, and the other warn't. And for a starter, I would go to work and steal Jim out of slavery again; and if I could think up anything worse, I would do that too; because as long as I was in, and in for good, I might as well go the whole hog.[13]

つまり、ハックは自分にとってかけがえのない友達のジムを引き渡すくらいならば、大きな罪を背負って地獄へ行ったほうがましだと考え、これからも悪い行いをしていくことを決意するのだ。ハックは良心や道徳に左右されるのではなく、自身で考え、自身の心に従うことに決めたのである。それ故に奴隷を自由にするという当時における悪い行いをやり抜くのである。

トウェインは『人間とは何か』の中で、登場人物の青年に対する言葉として、子供や原始人など、まだ文明社会が生んだ教育・良心・道徳を知らない者であったとしても、最初から善悪の区別はあると語っている[14]。つまり元々、善悪を区別する力は誰人にも備わっており、文明社会の教育・良心・道徳などによって、その区別する能力（本来の意思）が歪み、人間は過ちに気づかないばかりか、過ちを堂々と繰り返していくとトウェインは考えるのである。

3. ロンドンの自然主義、トウェインの人間機械論

ロンドンが文明社会を愛と友情に満ちた世界で描いているのとは対照的に、トウェインは文明があるからこそ人間は悪の行為を正の行為として行なっていくと説く。同時代を生き、同じくダーウィニズムの影響を受けているにもかかわらず、文明に対するロンドンとトウェインの考え方に違いが生じたのは、ロンドンが自然主義者

で、トウェインは人間機械論を説いていると考えられる。

では、ダーウィンは生物学として、ロンドンは自然主義として、そしてトウェインは人間機械論として、それぞれ神について触れている箇所を比較しそれぞれの違いの特徴を見てみよう。

ダーウィンの『人間の由来』(*The Descent of Man*, 1871) で、犬が人間と同じように信仰心を持つ様子を述べている。

> My dog, a full-grown and very sensible animal, was lying on the lawn during a hot and still day; but at a little distance a slight breeze occasionally moved an open parasol, which would have been wholly disregarded by the dog, had any one stood near it. As it was, every time that the parasol slightly moved, the dog growled fiercely and barked. He must, I think, have reasoned to himself in a rapid and unconscious manner, that movement without any apparent cause indicated the presence of some strange living agent, and that no stranger had a right to be on his territory.[15]

ダーウィンの飼っていた犬は、パラソルが動いたのは風が吹いたからであることに気づかず、何か不思議な力がパラソルを動かしたと思い、神秘的なものに対する恐怖と自らの命を脅かすかもしれない「何か」への敵対心により吠えた。ここでダーウィンは、動物にも神秘的なものを感じる心があり、それは人間の感じる信仰心と同じであることを述べている。神という存在は具体的には不明であり、また想像を絶するものであるため、何か不思議な力を持っていると思ってしまう。そのため、自分には考えの及ばないことをすることができ、世の中のものを支配している存在であると考えが進んでいくのである。故にダーウィンは、犬にとっては人間が支配しているものとして、人間の主人を神だと思う犬がいることをあくまでも生物学的見地から述べている。

ロンドンもオオカミ (ホワイト・ファング) が自分たちを支配しているものとして人間を描き、その人間をオオカミから見たら神だと思える場面を描いている。

> White Fang upon the man-animals before him. They were superior creatures, of a verity, gods. To his dim comprehension they were as much wonderworkers as gods are to men. They were creatures of mastery, possessing all manner of unknown and impossible potencies; overlords of the alive and the not alive, making obey that which moved, imparting movement to that which did not move, and making life, sun-coloured and biting life, to grow out of dead moss and wood. They were fire-makers! They were gods![16]

ホワイト・ファングは火の存在を知らなかったため、人間が木の枝を拾い集めそこから火を起こすのを見て非常に驚いた。そしてホワイト・ファングは人間のことを、大いなる王であり、神であると信じた。それは、生命や火を自在に操ることができるというという点から、自分たちには不可能である事も成し遂げることができる神秘的で卓越した存在と見たからである。そこには、完全なる服従の心が芽生えていた。ホワイト・ファングの考える神は、完璧な存在というよりも自分を支配する存在である。そのため、神である人間は感情にも支配される生物であり、オオカミと同じく現実に血を流す生物である。同じ生物ではあるが、人間は道具を使うことができるなどのオオカミよりも優れた能力を持っているために、オオカミよりも強く、逆らうことができない存在であるので人間を神だと考えている。ジャック・ロンドンの描くオオカミの考える神は、ダーウィンの観察した飼い犬と同様に、決して空想の神ではなく、現実に目の前にいる自分よりも力を持った存在が見方によっては神のように見え、そう信じこんでしまう場合もあることを描いている。

一方、人間機械論を展開するトウェインはどうであろうか。『不思議な少年44号』(*No.44, The Mysterious Stranger*, 1982) の中で、神などというものは存在せず、それはみんな夢なのであると44号が断言する箇所がある[17]。トウェインの説く人間機械論では、人間は持って生まれた性質 (遺伝) とその後の教育や環境によって決まり、人間は環境の奴隷であるとする。そのため、人間が神を信じるようになったのは、信じさせるような教育や環境があったからであり、実際に神が存在するはず

もなく、人間が勝手に考え出した夢にすぎないといえるのである。更に44号はこうも語る。

> In a little while you will be alone in shoreless space, to wander its limitless solitudes without friend or comrade forever—for you will remain a *Thought*, the only existent Thought, and by your nature inextinguishable, indestructible. …Dream other dreams, and better![18]

トウェインは、人間の権威、威厳、崇高さはただのまやかしであり、物質的な価値はないと考える。トウェインによると、そのような物質的なものは何もなく、ただ一人として人間は永遠にさまよっていく。そして、唯一存在するものは、消すことも破壊することもできない「きみ」なのである。つまり、人間は環境の奴隷であることは事実であるが、その環境が生み出した物質的なものを取り払ってしまうと人間は誰しも一人であり、その一人の「考え」が確かなものとなるのである。その時の時代や風潮が生んだものは一時的な「考え」かもしれない。そのため、神が存在し、すべて神によって動かされているという夢を見るのではなく、もっとほかのよい夢を見ていくようにと44号に語らせている。

結論

このようにダーウィンとジャック・ロンドンの動物にも信仰心があるという考え方は共通してはいるが、ダーウィンはあくまでも人間の目から動物を観察している。動物を生物学としての研究の対象としているわけで、客観的かつ科学的になるのは当然であろう。そのダーウィニズムが科学的に立証したものをロンドンは自然主義文学として、トウェインは人間機械論を展開してリアリズム文学として反映していった。そしてロンドンとトウェインは、その動物そのものの立場になりきって動物自身の心を描く。動物主体の物語とすることにより、読者に人間を客観視させた。

自然主義文学者であるロンドンは動物が人間の能力・武力に対する恐怖と服従により、人間（神）への信仰心が芽生えたと描いた。そして、動物は自分を支配する

力を持った神である人間を超えることはできず、自分の努力では今の環境を変えていくことはできないものとする。このように世の中は不条理であるとして悲観的に描いているため自然主義文学とされるのである。そしてロンドンは、当時の社会が（ダーウィンの進化論を勝手に人間社会に適用した）社会ダーウィニズム[19]に陥っているとして捉え、お互い助け合って危機を乗り越えていかなければならない人間同士が、浅はかな弱肉強食の闘争へ陥っていく様子を諷刺的に描いたのである。

トウェインは、人間は機械のように意思を持たず、ただ環境に動かされている生き物であることを自覚することの大切さと、まず何よりも自身の「考え」を第一として人間の本質を磨いていくことを訴えている。科学的な根拠もなく、自身で調べてみたわけでもないものを、周囲の反応や意見のみですぐ鵜呑みにしていく人間たちをトウェインは独自のユーモアを交えて描いた。トウェインの晩年の作品は、ユーモアが減り、悲観主義になっているとよくいわれるが、人間機械論には人間への期待と可能性が込められているのである。

［注］

1 『種の起源』（*On the Origin of Species by Means of Natural Selection*, 1859）、『人間の由来』（*The Descent of Man*, 1871）など。
2 アメリカ学会編『原典アメリカ史』第4巻, 岩波書店, 1982. を参考にした。
3 日影尚之「作家ジャック・ロンドンの登場をめぐって」麗澤レヴュー：英米文化研究, 第3巻, 1997, pp. 36-49、大井浩二『アメリカ自然主義文学論』研究社出版, 1973, pp. 140-141. 等参照。
4 London, Jack. *The Call of the Wild, White Fang, and Other Stories*, London, Penguin Books, 1981, p. 62.
5 『種の起源』参照。
6 James, W. Tuttletown. ‘Jack London in His Short Stories’, The Hudson Review, Vol. 47, 1994, pp. 291-298.
7 London, Ibid., p. 247.
8 『人間の由来』参照。
9 London, Ibid., p. 51.
10 『創価大学大学院紀要第30集』創価大学, 2008, pp. 197-211.
11 『人間の由来』第21章参照。
12 Twain, Mark. *The Writings of Mark Twain*, Tokyo, Hon no Tomosha, 1988, p. 21.
13 Twain, Mark. *The Adventures of Huckleberry Finn*, London, Puffin Classics, 1953, p. 284.
14 *What Is Man?* , Ibid.
15 Darwin, Charles. *The Descent of Man*, London, Penguin Classics, 2004, p. 118.

16 London, Ibid., p. 257.

17 Twain, Mark. *The Mysterious Stranger Manuscripts*, University of California Press, 1969, p. 404.

18 Ibid., p. 404.

19 ダーウィンの進化学説、特に生物界における生存競争・適者生存の原理を人間社会に適用し、社会には闘争と優勝劣敗の原理が支配すると主張する思想（Social Darwinism）。ハーバード・スペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）が提唱した。